

どんなのかな？ 阪大工学部 集まれ！ かきくけ工学部



特集記事

池上 俊郎* 司会：高野あさお，三谷昌登

Ecoactivity & Ecodesign

Key Words : Space Futon, An agricultural farming dome around bay areas

A marine plantation system using floating island of fish farm

—さあ，このコーナーは，阪大工学部の学生さんや留学生や卒業生のみなさんをスタジオにお招きして阪大工学部の魅力に迫っていこうというコーナーです．このコーナーからは科学レンジャーの三谷さんをお迎え，お送りいたします．

三谷 よろしくお願ひしまーす．

—さあ今日のお客さんです．今日は阪大工学部を三十三年前に卒業した池上俊郎さんです．こんばんは．

池上 こんばんは．

三谷 よろしくお願ひします．

池上 よろしくお願ひします．

—池上俊郎さんは中学の時の美術の先生にそっくりなんですよ．

三谷 僕もそう．僕は高校の先生．

—工藤先生というんですけど，そっくりなんですよ．

池上 そうですか．

—プロフィールをみていますと，池上さんも学校の先生をしていて，京都市立芸術大学の美術学部の教授でいらっしゃるんですよね．



* Toshiroh IKEGAMI

1948年11月生

大阪大学，工学部建築工学科卒（1974年）
現在，京都市立芸術大学，美術学部デザイン科環境デザイン研究室，教授，NPO法人 エコデザイン・ネットワーク 理事長

TEL：06-6204-5565

FAX：06-6204-0778

E-mail：ikegami@kcua.ac.jp



池上 そうです．デザインを教えています．

—そして建築家でもある．

三谷 おー！

—だから，我々の感覚は間違っていないのですよ．池上さんはどんな学生さんだったのですか？

池上 どちらかというとクラブ活動．登山部やったり．勉強は数学の方が得意だったですね．

—数学？それは中学とかその頃ですか？

池上 中学も高校もそうです．

—阪大工学部出身なのですね？

池上 そうです．純粋な建築工学の出身です．

—なんでまた，いつからデザインの方になられたんですか？

池上 美術をみるのが好きでして，それである時，自分の手書きをみて「はっ！」と．

三谷 すでに絵を描いていたんですね．

池上 そうですね．勝手に描いているというか．

—スケッチとか？

池上 スケッチというか，抽象的な．

—へえー、それでそっちの方が向いていると、

池上 医学に行くか建築に行くか、迷いました。

—ちょっと待ってください。医学と建築、ぜんぜん違うじゃないですか。

池上 それは、自分の人生の中で自由に生きたいという思いがあったのです。それで、お医者さんと建築家は自由だろうと、迷ったのですが、二浪して美術の方がいいかと、それで阪大の建築に行きました。

—それで、普通に企業にも入られたんですか？

池上 はい、入りました。そして都市計画とか建築の仕事をしました。自分の事務所をつくりたかったので、三十二歳で独立しました。

—自分の会社、アーバンガウス研究所をおつくりになって。

池上 最初は池上俊郎建築事務所でしたが、アーバンガウス研究所に変えました。磁場をつくるアーバンガウス。



—ガウスとは磁場ですか。そこで社長をしてはったのに、今は学校で教えている。

池上 そうです。九三年から大学で教えています。

—京都市立芸術大学といえば、歴史のある大学でしょ？

池上 そうですね。日本で一番古い百二十年の歴史がある美術大学です。

—教壇に立ちながら、建築の仕事もしてはるんですね。

池上 そうです。一緒に並行して建築空間や製品のデザインアートディレクションをしています。

—モノをつくっているということで、きょうは写真を持ってきていただいたのですが、不思議なものをつくっていらっしゃいますね。まず「スペースふとん」ってどういうことですか？

三谷 ふとんですね？

池上 宇宙用のふとんなんです。

—ちょっと待ってください。簡単におっしゃるんですけど、これはどういうことなんですか？

池上 京都市立芸術大学で宇宙への芸術的アプローチという研究をJAXAという宇宙航空研究開発機構と一緒にしてたんです。本当は宇宙船をつくりたかったのですが、無重力の実験をすることになって、ふとんをつくらうということになって。宇宙飛行士は、睡眠時間が毎日8時間あって。

—8時間は眠らないといけない。

池上 そう。1日の3分の1を快適に過ごせるようにするのは、建築家の仕事だと。

—それでスペースふとんを。

池上 そう。ふとんというのは、掛け布団は上から人を包んでくれますよね。

三谷 はい。

池上 宇宙では無重力だから、両方から包まれる。

—まゆのように、上からも下からも包まれる。

池上 そう。

—もうすでに？

池上 今、JAXAさんと西川リビングさんという会社と一緒に、実際に宇宙飛行士のためのものをつくっているんですよ。

—そのうち、池上さんがデザインされた、スペースふとんを持ち込んだシャトルが飛ぶ可能性があるんですか？

池上 そうしたいというか、本当にしようと思ってます。

—そのスペースふとんには、池上って書いておきま

しょうね。

三谷 旅館じゃないんですから。

—ちょっとくらいは入れておきましょうよ。

池上 いや、いっぱい入れておかな。

—最終的な夢というか。

池上 デザイナーとしてはものづくりですが、一方で環境問題が極めてきびしい状況にありますからね。北極圏の氷が解ける。去年はロシアに氷が接岸しなかったみたいな状況にあります。我々の世代は雪もありスキーを楽しむ時代も過ごしてきましたから、子供たちの世代にも同じことがやれるようにしたい。そういった意味で、環境問題を克服するデザインを皆で一緒にやろうと。一緒に行くと、全く知らない新しいデザインに出くわすことにもなるのですよ。例えば、工場型農業施設をつくっているんですけど、大阪湾の使っていない土地に工業用の立地を考えていたんですけど、そうじゃなくて農業施設をつくろうと。

—シーサイドであったり、海の真ん中にも何かをつくらうということですね。

池上 魚が帰ってくる装置、「海洋生物回帰装置」という名前をつけています。

—実際にこのプロジェクトは動いているわけですか？

池上 研究として行っています。都市型の農林水産業を復活させると、そこにはまた我々の知らないバイオテクノロジーが生まれてきたりとか、シー・リゾートが生まれたりとか。そうなれば、なにもバリに行かずに大阪に来てもらうことも可能になります。

—なるほど。

池上 きれいな海になったし、魚もいるし。

—そうですね。何もお金かけて行くことないですよ。

池上 また、エネルギーも。例えば、さつまいもを



つくって、焼酎もできますし、車用のアルコールもできますし。こういうことをやっていかないといけないですね。農業はデザイナーがする領域じゃないと思われていたんですけど、人が楽しめるとか、より良い機能をつけるとかという考え方をデザイナーがつけていかないと。

—枠を取り外して、みんなで環境のことを考えながらつくっていく。誰がつくる？池上さんにつくってもらおうか？そんな感じで進んでいけばいいですね。

池上 そうなんです。

三谷 めちゃめちゃ忙しい。体いくつあっても。

—これからますます考え出したら、たくさんアイデアが。

池上 そうなんです。今もいっぱい。働きながら遊ぶというか、遊びながら働く。海に潜ると汚い。汚い海に潜れば、じゃあ綺麗にするかって思うし。栽培したものを刈り取りにいったり、食べたり。

—都市計画じゃないですけど、みんなが一緒になって取り組んでいかないといけないですからね。

池上 そうですね。建築設計は棲息する場所をつくるのですから、何も人間だけじゃなくて、魚が生息してもいい、花や野菜が育ってもいい。

—環境問題を考えながら、いろんなことを。私は最終的にはスペースふとんを池上さんにつくってもらって、「池上」と名前が入ったものを、ぜひ私の目の前に持ってきていただきたいと思います。本日はありがとうございました。